

Title	『しのびね物語』のコトバの網：王朝物語世界の中の
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	詞林. 1999, 25, p. 37-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67429
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『しのびね物語』のコトバの網

—王朝物語世界の中の—

加藤 昌嘉

一 反復・重畳するコトバ

『しのびね物語』を読む者は誰しも、一頁のうちに、或いは一文のうちに、同じコトバが何度も繰り返して表出する、という現象に気づくことだろう。例えば、次のように。

- ①「……つひには思ふさまにおなじ所にて見んとおほして、なぐさみ給へ」など、一日なぐさめ給ふ。(四二頁)
- ②つれづれとおもひふし給ふらむ、……「こよひの御つれづれはいかにおほしつる。……」(四四頁)
- ③日にそへておほしなくさむよなく……こひしくおほしわする、よなく……墨染の御そでかわくよもなくしほり給へり。(七八頁)

だから稚拙だとか特異だとかいうのでは、いささかもない。むしろ、かようなコトバの反復・重畳は王朝物語にしばしば見られる事象であって、以下の如く、枚挙に遑がない。

a 三の皇子、いたく笑ひ給ひて、……あるじのおとど、参

り給へば、笑ひてつい居ぬ。……入りて見給へば、御達笑ふ。……おとど、「今からも、はた」とて笑ひ給ふ。……尚侍のおとど、うち笑ひて、

(「うつほ物語」「葦開上」巻 四七四～四七五頁)
b 泣く／＼御達を出だして、抱き入れさす。いかなりつらむともありさま見ぬ人は、おそろしからで抱き入れつ。

(「源氏物語」「手習」巻 三三九頁)
c 思出づる人もあらむかしなど、思出づる時も多かり。

(同 三七七頁)
d 「……心構へのいと心憂き御あたりにて、げに人のため、世の音聞き心憂きことを言ひ出でて、本意のこと逆へられたるは、妬く心憂きわざかな。……」

(「夜の寝覚」巻四 四三三頁)
e あさましかりし夢の心地して、ほのかにきさし御けはひも、いかなりし仲のちぎりぞと、おそろしくもあさましくも、

(「有明けの別れ」巻二 三三八頁)
f いひ知らずうるはしき顔つくりて、……「こともよろし

からずの実法顔や。……」「いたくうるはし顔なら
で、……」「……いつしか顔紅になして、……」「あの顔の
赤さは、うれしきよし、わびしきよし。……」

〔我身にたどる姫君〕巻六 一〇〇—一〇一頁

こうした繰り返し表現——就中「源氏物語」のそれ——は、
夙に、萩原広道「源氏物語評釈」が「眼目の語」として析出
したもので、近年でも、池田和臣氏や池田節子氏らによつて、
物語の方法として考究されているものである。²つまり、コト
バの反復・重畳というのは、行為や心情、事態や雰囲気、
累積的・重層的に顕現せしめる、王朝物語特有の叙法なので
ある。

さて、「しのびね物語」に於ける特徴的なコトバについて
は、大倉比呂志氏の論究がある。³氏は、「しのびね」「力なし」
といったコトバを鍵語として取り挙げ、「しのびね物語」の
人物造型・物語展開の方法を開鑿する。しかし、「しのびね物
語」というテクストには、更に多くのコトバが、散在・遍在
し、共鳴・牽連してはいなかったか。

この物語に類出するコトバとしては、例えば用言だけで
も、次のようなものが挙げられる。

- ・三〇例以上……「うつくし」「しのぶ」
 - ・二〇例以上……「あはれなり」「心ぐるし」
 - ・一〇例以上……「うし」「くるし」「心うし」「ひかる」
- 「引きぐす」「便なし」

以下、「あさし」「あさまし」「あぢきなし」「起きあがる」
「おそろし」「おとなし」「か、やく」「けたかし」「つれづれな
り」「なぐさむ」などが続く。或いは、「顔」「車」「声」「心」
「宿世」「涙」「身」など数多の名詞、もしくは、「うち驚かる、」
「同じ雲居」「親の心」「数ならぬ身」「衣ひきかづく」「逃るべ
くもあらず」「夢のやうなる心地」「世の常」などの複合表現
を加えることもできよう。

こうしたコトバは、ある場面に輻湊して現出したり、全篇
にわたつて間歇的に現出したりする。そして、それは、それ
のみにとどまる事象ではない。コトバは、反復・重畳するこ
とで、人物の属性を生成し、物語の機構を現成する、そん
う力源・駆動因となるのである。

では、「しのびね物語」のコトバの群れは、如何ような物語
力学を発現せしめているのか。そしてそれは、王朝物語の中
で、如何ような位置を占めるものなのか。

二 男色的交誼の機能

「しのびね物語」に於いては、「女ならましかば」という表
現が反復・重畳している。

- ①「帝」「……われも女ならましかば、中納言にはいかな
るえぞがしま、でも、したひ行べきこ、ちこそすれ、
……」とおほしよるに、
- (五八頁)

②「帝↓姫君」「……まろは女ならまし**か**ば、おなじはら
からなりとも、かならずたゞにはおもふまじきさまのし
たるを」など、
(五九頁)

③「帝↓姫君」「……まろ女ならまし**か**ば、じやうどのむ
かへなりとも、此人を見捨てはなるべしとおほえぬさ
まのしたるを、……」
(六一頁)

いずれも、自分が女であつたら、中納言≡きんつねを慕い
恋うにちがいない、という帝の言である。

更に、テクストには、これらと連鎖・重合する、次のよう
な表現が存する。

④中將どの中納言になり給ひぬ。いよく御門の御いとほ
しみにて、人もうらやみ奉るに、
(四八頁)

⑤「帝↓きんつね」「……ものおもひのけしき見ゆるは何
ごじにか、き、てともにおもはゞや」と
(四八頁)

⑥いとゞなまめかしくうちにはひたるまみ、くちつきなど
を、御めとゞめてまばられたまふ、これ「きんつね」に
すししもなれそめたらん女は、かならずしふはとまりな
んと、いろめかしき御心におほされて、
(六一頁)

帝が、きんつねを一層「いとほしみ」、きんつねと「ともに
おもはゞや」と情をかけ、女ならばきつと想い焦がれるだろ
うと「いろめかしき」心に思った、というものである。

帝のきんつねに対する、いわば男性的なまでの親近感が、
かくまで繰り返して語られるのは何故なのか。

まず、他の王朝物語に於いて、「われ女ならば」や「女にて
見る」などの、男から男への情愛、いわば男性的交誼が、如
何なる機能を持つものだったのか、確認しておこう。

例えば、『源氏物語』に於いて。

a 紐などもうち捨てて添ひ臥し給へる「光源氏の」御火影
いとめでたく、「頭中將は」女にて見たてまつらまほし。

(『源氏物語』「帚木」卷 三八頁)

b 色めかしうなよびたまへるを、「光源氏は兵部卿官を」女
にて見むはおかしかりぬべく、人知れず見たてまつり給
にも、かたゞくむつましくおほえ給て、……「兵部卿官
は光源氏を」いとめでたしと見たてまつりたまひて、婿
になどはおほしよらで、女にて見ばやと色めきたる御心
には思ほす。

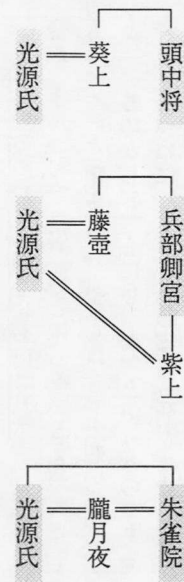
(同「紅葉賀」卷 二四五―二四六頁)

c 院「朱雀院」の御ありさまは、「光源氏は」女にて見たて
まつらまほしきを、
(同「繪合」卷 一七〇頁)

a は頭中將と光源氏、b は兵部卿官と光源氏、c は朱雀院
と光源氏の間が発露した「女にて見る」である。⁵⁾

『源氏物語』では、以下の系図の如く、これらの男(綱掛け
を施した)が、決まって、間に女を挟んだ義兄弟関係にあるこ
とに留意しよう。そして、両者が、政治上もしくは恋愛上の
対立関係にあったことを想起しよう。

◆「源氏物語」



かような関係性は、「うつほ物語」や「夜の寝覚」にも見ることができ。

d まづ、うち見るにも、かの君「兵部卿宮」を女になして持たたまほしく、さならずは、我「朱雀帝」持たれまほしくなむ見ゆる。

e 故侍従「仲澄」は、これ「仲忠」を妻のやうにてこそ、これにまかり通ふ所ならず侍りしか。

(同「蔵開上」卷 五一五頁)

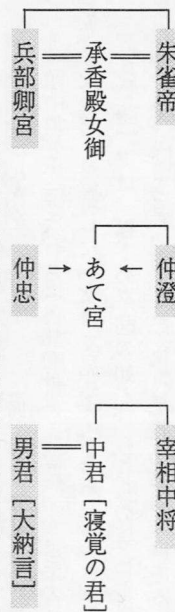
f 「宰相中将」「めでたの人の御様や。我、女にて、かばかりうちおぼえ、ながめたらむを見ては、いみじからむ後の位をも捨てて、靡き寄りなむかし」と、「大納言を」つくづくまもり入りたる。

(「夜の寝覚」卷一 一〇九頁)

d は、朱雀帝と兵部卿宮との、e は、仲澄と仲忠との、f は、男君と宰相中将＝寢覚の君の兄との間に発したものである。これらの関係も、以下の系図の如く、「源氏物語」と同

様、本来、対立して然るべき、間に女を挟んだ男同士なのであった。

◆「うつほ物語」



◆「夜の寝覚」

(矢印は、情交のない、恋愛感情のみの関係を表す。)

このように、王朝物語にあって、「われ女ならば」「女にて見る」というコトバは、政治上・恋愛上、拮抗するはずの男二人の仲らいに発露し、両者を精神的に取り結んで、その衝突を未然に防いでいるのだ。

神田龍身氏は、「いはでしのぶ」「石清水物語」「風に紅葉」を考査する中で、「起こるかもしれない暴力現象をあらかじめ排除するための男色であり、だからこそ平和的なのであり、世代交替も円滑にいく」と述べている。肯綮に当たる発言であるが、これは、微妙な差こそあれ、王朝物語全般にわたっていえることだろう。

「うつほ物語」「源氏物語」「夜の寝覚」など、二人の男の片方が、女と兄妹関係にあるのが一つの型であるようだが、更

に、「狭衣物語」以降、いわゆる中世王朝物語にあつては、男、女、男という、まさに恋愛上の三幅対の両翼に、その三角関係を緩和すべく、「われ女ならば」「女にて見る」というコトバと、そして男色の交誼が生起することとなる。

g「狭衣中将の」さし出でたまへる腕などの白くうつくしげなるさま、「春宮は」女もえかからじかしと見えたまふ。……せちに引き寄せさせたまふを、「あなむつかし。暑くはべるに」と、ひこじろひたまへる御遊び、いとをかし。

h新中納言のいたく青み瘦せたるしも、なまめかしくうつくしげなれば、「朱雀帝」「女にて見ましかば」とうち思し召さる。
〔海人の刈藻〕巻三 一三三頁

i「秋の大納言」……我も女ならば、いかなるきさいの宮成とも、かならず心をかけなんかし。余所にてのみるめなく、あはれになつかしけれ」など、つねにの給へば、

「石清水物語」上巻 六六頁
 jさまことによしづきて、けちかきにしたがひて、いと、なつかさまたぐひなきに、おんなにてみまほしくおほさる。
〔同〕七三頁

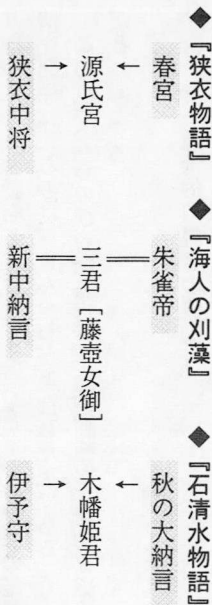
kいかにせんとおもひたらん人よりも、たぐいなうなまめかしげなるは、げに女ならば必こ、ちはなびきなんかしと、「大将は」き、いり給へるに、

〔いほでしのお〕巻一 二二四頁

l「大納言」「内大臣の」けわいありさま、ちかきてあたりなどの、ことわりにても過ていふにもおはするかな。我にて、あかずひきわかれば、いかなる心ちせん。
〔同〕巻三 四五六頁

m「中納言は若君を」かき抱きて臥したまへば、……うち笑みて、かいつきて寝たまへり。……この君をば、女のやうにひきそばめて、乗せきこえたまふ。
〔風に紅葉〕巻一 一三三頁

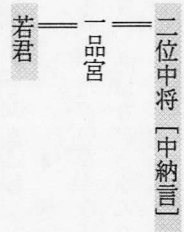
中には、肉体的接触＝情交を伴う明らかな男色関係も含まれるが、しかしいずれにあつても、「女にて」「女ならば」といったコトバは、以下の系図に見られる如く、女を挟んだ左右二人の男（綱掛けを施した）の間に、精神的紐帯として顕現するのである。或いは、ここに、やはり男色的な関係と思われる、「あきざり」「木幡の時雨」「我身にたどる姫君」の男たちを加えてもよい。



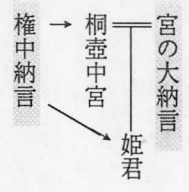
◆『いはいでしのぶ』



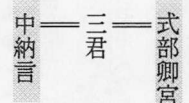
◆『風に紅葉』



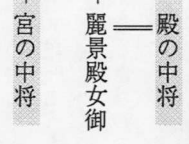
◆『あきざり』



◆『木幡の時雨』



◆『我身に
たどる姫君』



かような系譜に、『しのびね物語』を布置すれば、もはや明らかだらう。
 すなわち、先に挙げた①⑥の如く、『しのびね物語』が、帝をして、いわば恋敵であるきんつねに男色のなまでの情愛を注がしめているのは、帝・しのびねの姫君・きんつね、という三角関係の上に惹起されて然るべき闘争状態——恐らくそれは帝からの専制的な圧力となるだろう——を回避するためであるのだ。

実際、帝は、当初はきんつねとしのびねの姫君との仲を取り持つような言動をしており、また、帝がしのびねの姫君と情交関係に入るのは、きんつねが遁世した後である。
 この点で、『しのびね物語』は、王朝物語の正統的な継承者だといえよう。

三 遁世的口説きの波動

『しのびね物語』に於いては、しのびねの姫君を己のもとに引き取りたいと語るきんつねの言辞が、反復・重畳している。例えば、次のように。

- ①「……まろはすこしのへだてもいまよりはものうかるべきを、ちかき所へわたし奉らん」と、 (三三三頁)
 - ②所せき御身には、いとだいになるべきとおほして、わたし奉らんことをの給ふ。 (三三三頁)
 - ③こ、ろやすくうちとけて、とのへもわたししてみばやおほすぞ、せめてもの御心ざしなる。 (三四頁)
 - ④三条なるところしつらひて、かろくしからずもてなしきこえんとおほす。 (三三六頁)
 - ⑤「……三条なる所しつらひはてなば、わたし奉りて、心やすくあらん。……三条へわたりなば、あこをもひと所にてみせ奉らん、……」 (四〇頁)
- こういった発言は、若君だけが、きんつねの父Ⅱ内大臣の

邸に引き取られた後も、同じように繰り返される。

⑥「……つひには思ふさまにおなじ所にて見んとおほして、なぐさみ給へ」など、
(四二頁)

⑦三条へわたしで、あなづらはしからずかしづき聞えむとおほして、たゞ姫君にもかくぞきこえ給ふ。
(四三頁)

⑧殿は三条の御所つくりあらため給ひて、うつし給はんとすることきこしめして、「……かしこへわたししてもめかしなば、……」
(四八―四九頁)

落魄し隠棲する姫君を、男が都の自邸に引き取らんとする物語としては、「あきぎり」「石清水物語」「いはでしのぶ」「兵部卿物語」などが挙げられるが、「わたし奉らん」というコトバをかくまで執拗に現出する「しのびね物語」は、やはり注目される。

結局、こうした反復・重畳とは反対に、或いは、それだけにより逆説的に、しのびねの姫君は、きんつね邸に収まることなく、身を隠し、後、宮中に入る。ために、煩悶するきんつねは、出家の道に進むこととなる。

実は、いま辿り見たきんつねの言辞には、そうした悲劇的な終末を暗示するような別種のコトバが、相交互し、隣接して現出しているのである。

⑨いかなるいはほの中にも、げに心かなはぬ世ならば、ひきくしてこそすくさめとおほすも、あさからぬ御心ざしなり。
(三八頁)

⑩これも心がらぞや、いかなる所へも引くして、いはほの中にももろともにすこしなばやとおほしよるをりくもあれど、
(六九頁)

この「いはほの中」は、「古今和歌集」の、

a いかならむ巖の中にすまばかは世のうきことのきこえこざらむ
(古今和歌集 雑下・九五二・よみ人しらず)

を引き、また、「源氏物語」の、

b 「光源氏」「猶、世にゆるされがたうて年月を経ば、巖の中にも迎へたてまつらむ。……」
(源氏物語「須磨」巻 一二二頁)

を踏まえてもいるだろう。(もちろん、他の王朝物語、例えば、「うつほ物語」「落窪物語」、「あきぎり」「有明けの別れ」「石清水物語」「風につれなき」「木幡の時雨」「我身にたどる姫君」などにも、「巖の中」「岩の中」という表現は存する。)

更に、「しのびね物語」には、
⑪「中納言こそうせにけれ。いかにかなしくおほすらむ。されどもいづくのいはま、でも引くしたらばこそあらめ、かたおもひこそよしなけれ。……」
(七七頁)

という、きんつねを揶揄したような帝の言もある。いずれにせよ、きんつねは、しのびねの姫君に、共にあらんことを契るに際し、「巖の中」という、半ば遁世の色を漂わせた言辞を繰り返すのである。

加えて、次の如き表現も、これと繋がるだろう。

⑫いかなる野山のすゑまでもひきぐし聞えて、命のあらむ
ほどは、心やすくあらんと思ふを、 (三九頁)

⑬いづかたへも引ぐして、野にも山にもあくがれまほしく
おほせど、 (四二頁)

この「野にも山にも」も、やはり「古今和歌集」の、

c いづこにか世をばいとほむ心こそ野にも山にもまどふべ
らなれ (古今和歌集 雑下・九四七・せせい)

を踏まえてゐるだろう。また、この歌は、先の九五二番「い
かならむ巖の中に……」と連続層にあるものである。

なお、その他、類似の表現として、

d 「光源氏」……命をもみづから捨てつべく、野山の末に
はふらかさんに、…… (源氏物語「幻」巻 一九五頁)

e 「平宗盛」……いかならむ野のすゑ、山の奥までも、行
幸の御供仕らんと思はずや (平家物語「巻第七「福原落」 六一頁)

などが挙げられようか。(もちろん、他の王朝物語、例えば、「う
つほ物語」「狭衣物語」「石清水物語」「我身にたどる姫君」など
にも、「野にも山にも」「野山の……」という表現は存する。)

だが問題は、「しのびね物語」に於いて、「巖の中」「野にも
山にも」「野山の末まで」という、「古今和歌集」雑下に流れ
る無常感・厭世観を下敷きとした言辞が、決まって「引きぐ
す」「わたし奉らん」というコトバと膚接し、女を己のもとへ
引き取ろうとする口説き文句のうちで、連動して表出される

というところにある。

中世王朝物語にあつては、「巖の中」「野山」というコトバ、
或いは、類同のコトバは、次のように用いられるのが通常だ
ろう。

f 深く山路へ思ひ入り給ふに、あふみちならねば、なぐさ
むことかたし。 (あさちが露「三七頁)

g 身をすつるいはほのなかのしるべせばたがまことをばた
のまざるべき (有明けの別れ「巻一 八二頁)

h 「……ただ人しらざらん山のかた、谷のそこにかげをか
くして、しづかにおこなひをせん」 (同 一三四頁)

i 「同じくは、われも人も身をなきにして、いかなる野山
にもあて、かくしきこえなば、……」 (石清水物語「上巻 六五頁)

j 「いまは、ひとへに憂きを菩提の縁として山林にも入り
なん」と深う思したてど、 (木幡の時雨「四〇頁)

k ただ道に任せて谷深く尋ね入り給ふに、人の通ひたる方
もなく島の跡も見えぬ谷の底に二三間ばかりある草の庵
あるを、 (苔の衣「秋 一八六頁)

l 「いかにして憂き身を隠さん山のあなたもがな」と思ひ
回せど、 (同 冬 一三五頁)

m 「……いかにもしてこ、をのがれつ、ふかきやまにもと
ちこもり、のちのよをねがはばや」とおほせば、 (兵部卿物語「三五頁)

つまり、これらは、きわめて直接的に、出家遁世そのもの、或いは死そのものを志向するコトバであるのだ。かかるコトバを、「引きぐす」「わたし奉らん」という口説きの文句とともに配備する「しのびね物語」の叙法は、やはり留目すべきである。

すなわち、「しのびね物語」は、きんつねとしのびねの姫君との恋物語を始動しながらも、しかし同時に、あたかも物語の結末を見据えているかのように、遁世と出家を印象づけるようなコトバを、そこに湧出せしめているのである。

果して、きんつねは、失踪したしのびねの姫君が帝の寵愛を受けていることを知り、独り世を捨て髪を下ろすこととなるが、そこでテクストに現れるのは、皮肉なことに、己が姫君を掻き口説いた折のコトバ、「野山の末」であつた。

⑭「……みづからこそいかなる野山のすゑにもとぢこもらめ、……」
(六四頁)

⑮「……いかなる野の末にても、御ことのわすれがたさに、ねんぶつもさはるべきとおもふこそ、かねてより心うけれ」
(六六頁)

⑯「たゞさぶらひつき給へ。野山のすゑにても、かやうにてさぶらひ給ふときかば、いとうれしかるべし。……」
(七一頁)

⑰「……いづくの野のすゑまでも引ぐし奉りてこそ、あらまほしけれども、……」
(七六頁)

そして、この前後には、こうした類いのコトバが、それらと連接して、次の如く、反復・重畳することになる。

⑱「おはせざりし日より、いかなる山のおくまでも、引こもりたく侍しかども、……心のかぎりはおこなひて、終にすゞしき道におもむきなば……」
(六六頁)

⑲つみふかくいとおそろしけれど、まことの道にいらなば、つひにはたすけ奉らんと、
(七三頁)

⑳菩提の岸にいたりなば、のちの世のやみをはるけ奉らむ身となり侍る、
(七五頁)

㉑有明の月は雲にすみはてよよをこそ山のおくにいと
も
も

おもひ入み山がくれのすまひにもかたみにつる、人のおもかけ
(七六頁)

「しのびね物語」に於いて、きんつねの遁世願望が濃厚となり、こうしたコトバが繰り返されるのは、「鎌倉時代物語集成」でいえば六六頁以降、つまり、宮中にいるしのびねの姫君と再会したきんつねが、姫君に帝の殊寵を得るよう諭してからである。

だが、それ以前、いわば二人の恋愛譚が綴られるくだりにあつても、テクストは、「巖の中」「野にも山にも」「野山の末」といったコトバを以て、既に、出家譚を志向してあつたのだといえる。或いは、むしろ、さような言辞の繁殖的な反復・重畳が波及し、出家遁世への途を展いてしまったと

いふべきかも知れない。

物語の愁歎場に於いて、しのびねの姫君は、きんつねに、「もろともにくしでおはせよ」「たゞ今まづいづくまでもくしでおはせよ」(七二頁)という強い訴えをするが、これは、きんつねの平生の口吻を逆手にとつた言であつたわけだ。

四 「うつくし」「けたかし」の線

「しのびね物語」は、きんつねやしのびねの姫君など登場人物を造型するに際し、決まって「うつくし」「けたかし」といつたコトバを反復・重畳する。それは、次のように分類できよう。

【資料A】きんつねに附着する「うつくし」

- ① のたまふ御けしき、よのつねの人ともみえずうつくしければ、
(二九頁)
- ② いとけたかさそひ給へる御ありさまの、うつくしさのみまさるに、
(三五頁)
- ③ うつくしき御さまどもの、さしならび給へるは、みるかひありてめでたきに、
(三六頁)
- ④ うちほゝゑみ給へば、いはんかたなくうつくしげ成、
(四三頁)
- ⑤ 御さまのうつくしさに、よろづのとがもわすられて、
かしづき聞え給ふ。
(四九頁)

⑥ いとなまめかしくけたかくおはしますを、いとうつくしとみ奉り給ふ。
(五八〜五九頁)

⑦ みるまゝにあいぎやうづき、うつくしきことのならびなきを、
(六二頁)

⑧ もの思ひにやせたまへるしも、いふよしもなくうつくしきさまなり。
(六八頁)

⑨ いつよりも花やかに引つくりひ給へるを、殿は、うへは、いとうつくしとおほしたり、
(七三頁)

⑩ いとわかしくうつくしうおはせし名残にやつれ給へども、
(八四頁)

【資料B】きんつねに附着する「けたかし」

① ↓【資料A】②に同じ。

② ↓【資料A】⑥に同じ。

③ その中にまみなどのけたかく、色もよのそうよりしらくおはするを、
(八三頁)

【資料C】しのびねの姫君に附着する「うつくし」

① かみのこほれか、りたるは、まづうつくしやと、ふと見えたるに、
(二八頁)

② 少しほゝゑみたるかほの、いはんかたなくうつくしければ、
(二八頁)

③ かみはたけにすこしあまりて、かむざしひたひつきのあてにうつくしさは、
(三三頁)

- ④いとをさなげにの給へるさま、わかうつくしければ、
 (三三頁)
- ⑤ごきくれなぬのひとへ、御こうちきなど、いとうつくしくして奉る。
 (三四頁)
- ⑥かの御さうぞくどもきせ奉りてみたまふに、なほうつくしと見給ひ聞え給ふ、
 (三五頁)
- ⑦↓【資料A】③に同じ。
- ⑧うつくしげに聞え給ひてそひふし給へる。(四八頁)
- ⑨「……この君はいとうつくしうておはせし、……」
 (五二頁)
- ⑩しろくこまやかに、いとうつくしく見るに、おどろかる、心ちのすれば、
 (五二頁)
- ⑪かほかむざしあてやかに、うつくしさいふよしもなきを、
 (五七頁)
- ⑫いよくうつくしげなるさまをも見たてまつらじと、
 (六七頁)
- ⑬やつれ給へども、なか／＼うつくしさのたぐひなければ、
 (六七頁)
- ⑭いよくひかるやうに、しろうつくしければ、
 (七三頁)
- ⑮いと／＼うつくしくひかりそひて、うへのおほしめすも御ことわりにおもふ。
 (七九頁)
- ⑯「……しづみふしたるをさへ、うつくしく思ひしに、す

こし引つくるひ給へば、……」 (八〇頁)

【資料D】しのびねの姫君に附着する「けたかし」

- ①あいぎやうなつかしく、けたかきことのつきせぬもありがたきことなり。
 (三五頁)
- ②いづかたもみこのすちにて、かくけたかきところはたぐひなきぞかしと、
 (三七頁)

以上が、きんつねとしのびねの姫君に発露している「うつくし」「けたかし」である。「しのびね物語」は、圧倒的なコトバの反復・重畳を以て、この二人を生成してある。

加えて、この二人の息子Ⅱ若君も、やはり同じく「うつくし」というコトバを有している。

【資料E】若君に附着する「うつくし」

- ①あくる八月に、うつくしきわか君ぞうまれ給へる。
 (三五頁)
- ②わか君ふたつになり給ふ。いとおほきにうつくしきことのたとへんかたなきを、
 (三六頁)
- ③わか君ひかりそひて、うつくしくなり給ふと、かたことうちませてものの給ふを見るたびに、
 (三六頁)
- ④「何をなき給ふぞ、小車のほしきか」とて、うつくしき御手にて御なみだをかきはらひ給へば、
 (四〇頁)
- ⑤うつくしげにしたて奉りてみ給へば、
 (四〇頁)
- ⑥さらにたぐひなくうつくしきことのみこひしかるべき

を、 (四〇頁)

⑦とのうへ御らんじて、「うつくしきまちこのさまかな、……」 (四一頁)

⑧此頃はことさらひかりそひて、うつくしくおひたち給へ
ば、 (四二頁)

⑨此ほどにうつくしく大きになり給ひて、母君の御くびに
とりつきて、 (四七頁)

⑩「は、君はいづくへおはしけるぞ。あこをはすて、」と、
うつくしげにの給へば、 (六一頁)

⑪うつくしきかほのあいぎやうは、中宮にかよひ給へる
に、 (八一頁)

⑫これはすこしものくしく、たけだちもそゞろかにうつ
くしきものから、 (八三〜八四頁)

【しのびね物語】は、きんつね・しのびねの姫君・若君とい
う親子を、「うつくし」「けたかし」と顕揚してやまない。因
みに、三者は、「ひかる」「か、やく」とも賞揚されるが、そ
の一方、帝が、「うつくし」「けたかし」「ひかる」「か、やく」
と称されることは、ただの一度もない。

なお、右に挙げたものの他に、次の例がある。

【資料F】桐壺女御に附着する「けたかし」

①いとにほひやかにけたかきものから、あひぎやうこぼれ
て、 (三三頁)

【資料G】尼君に附着する「けたかし」

①の給ふさまの、けたかくうちにほひたるさま、いみじう
みゆるに、 (三三頁)

②↓【資料D】②に同じ。

【資料H】春宮に附着する「うつくし」

①「しよきやうでんは、唯今のきさいのみやにて、若宮
春宮と聞ゆ。おとなしやかに、うつくしうおはします」
など、 (八四頁)

②春宮も八ばかりにおはしませば、いよくうつくしう、
けたかくて御心もおとなしく、 (八五頁)

【資料I】春宮に附着する「けたかし」

①↓【資料H】②に同じ。

以上が、「うつくし」「けたかし」の全用例であるが、その
偏りは異様とさえいえよう。すなわち、【しのびね物語】は、
かかるコトバを累積・輻湊することで、きんつね・しのびね
の姫君・若君の高貴なる魂姿を際立たせ、とりわけ三者を、
物語の中心に屹立せしめているのである。

それにしても、【しのびね物語】が、【資料H】【資料I】の
如く、とりわけ春宮に、「うつくし」「けたかし」を発露させ
るのは何故なのか。

この物語で、「うつくし」「けたかし」を同時に有するのは、
【資料A】②⑥・【資料H】②の如く、きんつねと春宮の二者

のみである。

これらのコトバは、連動し鎖列を成すことで、きんつねと春宮とを重ね合せ、あたかも両者が親子であるかのように傍らしてさえいるようだ。

五 春宮の両義性

春宮の問題を考えるには、この物語の最終場面、すなわち、しのびねの姫君が后となった時世、成人した若君中將が、出家生活を送る父きんつねを訪うくだりに目を据えねばならない。

若君中將は、きんつね中納言人道に、現在の都の様子を語る。そこで、【資料E】で見た、春宮に附着する最初の「うつくし」が現出する。

①「しよきやうでんは、唯今のきさいのみやにて、若宮春宮と聞ゆ。おとなしやかに、うつくしうおはします」
など、大かたにかたり申給へば、
(八四頁)

それを聞いて、いくばくかの動搖を禁じ得ぬきんつねを、物語は次のように描く。

②「ことは卅五になり給ふ、いとわかしくうつくしうおはせし名残にやつれ給へども、人にまぎるべくも見え給はず。
(八四頁)

ここでは、きんつねと春宮に発露する、二つの「うつくし」

の近接と共鳴を記憶にとどめておこう。

結局、きんつねは、中將に、「此世のえいぐわにほこりて、後の世のやみわすれたまふな」などと訓戒し、これを見送る。その際、きんつねの脳裡では、次のような回想がなされている。

③御うしろかけを御らんじおくりて、ありしあかつきしたひ給ひて、なき給ひしこと、たゞ今のやうにおほえ給。
(八四頁)

この「ありしあかつきしたひ給ひて、なき給ひしこと」とは、一体、いつのことなのか。

もちろん、いま中將を見送っているのだから、一義的には、きんつねが出家直前に、最後まででもと我が子の顔を見、別れを告げた、次のくだりを指示してあるのだろう。

④今一度わか君のみまほしければ、おはして御めのとおこし給。「などかく夜ぶかくは」と申せば、「しほしものへまうづる。わかをひさしく見るまじければ」とて、……
今ならでいつの世にかまた見るべきとおぼすに、かきくらす心ちたへがたければ、めのとのかたへゆづり給ひて、「ものよりかへらんほどは、めはなたでいとほしくせよ」とて出給ふ。
(七三―七四頁)

しかし、「夜ぶかくは」とあって、必ずしも「あかつき」ではなく、何よりも、「したひ給ひて、なき給ひしこと」は全く語られていないことに留意すべきである。

恐らく、③の「あかつき」は、「しのびね物語」に存する次の二つの「あかつき」の場面を、強く招喚してあるだろう。

⑤今夜はこきでんのまゐり給へるよしきこゆれば、よきひまとおもひて入奉る。……「きんつね↓姫君」……此世のたいめんは、こよひばかりこそかぎりならぬ。……かくまでちかづき奉るも、いとびんなきことなれど、……「……人めつ、ましければ、あかつきに中納言どのは、かへり給ふ。」
(六五―六六頁)

⑥かの御つばねへまぎれいり給ふ。よの常だにも、わかれはかなしかるべきを、……「姫君」……もろともにごしとおはせよ、さらに残りともまらじ、おくらかし給はんが心うきこと、したひ給へば、……「きんつね」……此くれをまち給へ。まゐりてあかつきにもろともに出侍らん。……「……せんかたなくてなき給へば、なさけなくふりすて、は、いかでか出給ふべきなれど、とかくこしらへ給ふほどに、夜も明がたになりぬ。……まことしいひをしへて出給ふ、
(七一―七三頁)

⑤は一度目の、⑥は二度目の、宮中の局に於ける、きんつねとしのびねの姫君との密会場面である。

そして、その⑥、独り出家を決意したきんつねが、それを姫君に告げぬまま、「此くれ」、同じ「あかつき」に再び迎えに来ようと宥めるくだりに、姫君が「したひ給い」、「なき給」うた、というコトバがあるのである。

すなわち、出家後に回想される、③「ありしあかつきしたひ給ひて、なき給ひしこと、たゞ今のやうにおほえ給」というのは、⑥のくだりを志向してあるのだ。

また、この⑥の折のことは、出家後のみならず、きんつねが髪を下ろす、まさにその時にも想起されている。

⑦「るてん三がい」と三度らいし給ふに、さすがに涙のさきだちて、めもみえたまはず。たゞ姫君のしたひ給ひしおもかげ、若きみのことおほし出るに、こゝろよわく、涙のふりおつれば、
(七四―七五頁)

出家後のきんつねが、③⑦のように、殊更⑥のときのことを振り返っているのは、それが、最後の、実事ある逢瀬であったからである。⁵¹⁾
となれば、①②で、きんつねと春宮の「うつくし」が連接して現出するわけも理会できよう。つまり、テキストのコトバは、春宮が、帝の皇子ではなく、最後の逢瀬⑥の際に身籠った、きんつねと姫君の息子であると発現してあるのだ。

出家後のきんつねを描いた物語は、その掉尾で、次の如く、春宮の二例目の「うつくし」を表出する。

⑧さてその、ち、二位の中納言になり給ひ、春宮も八ばかりにおはしませば、いよくうつくしう、けたかくて御心もおとなしく、よをたもち給とも、いかにうたがひあるまじう見えさせおはします。あくる春は、御門御くらゐさらせ給て、春宮くらゐにつき給、かの中宮は女院と

ぞ申ける。

(八五頁)

先に見た如く、「しのびね物語」に於いて、「うつくし」「けたかし」を同時に有するのは、きんつねと春宮の二者のみである。そして、そのコトバの鎖列が、きんつねと姫君との最後の逢瀬⑥を想起せしめる③とともに、物語の閉じ目⑧にあたって、「いよくうつくしう、けたかくて」と顕現され、なおかつ、「二位の中納言になり給ひ、春宮も八ばかりにおはしませば」と、きんつねの息子と春宮とが併置されつつ、「よをたもち給とも、いかにうたがひあるまじう見えさせおはします」という意味深長な語りによって纏められているのであつてみれば、テクストは、春宮を、きんつねの隠された子として現成してあるといえるはずだ。

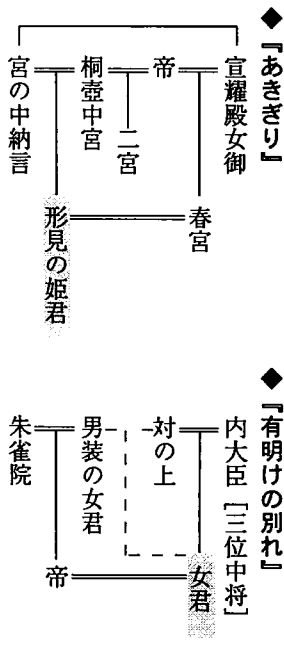
ただし、年立上では、春宮は、きんつねの子ではあり得ない。きんつねと姫君との最後の逢瀬⑥は、物語の第五年目のことであり、きんつね出家後は、ほぼ一年、帝と姫君とが情交関係に至ることはなく、後、姫君が皇子を産むのは物語の第七年目の春のこと(八一頁)であるのである。

或いは、むしろ、物語は、実に周到に一年の冷却期間を置き、しのびねの姫君の産んだ子が、帝の真の皇子であること、あえて殊更に、理詰めで訴えていると見るべきかも知れない。この物語の「煩瑣なまでの(時)の記述の頻出」は、そのためにあるとさえいえる。

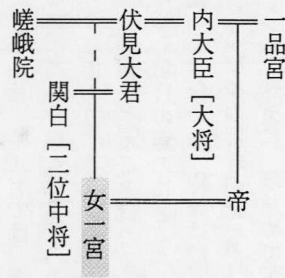
「しのびね物語」に於いては、帝の皇子でない子が春宮＝新帝になることは、犯すべからざる禁忌として忌避されつつ、しかし同時に、テクストのコトバは、潜在的に、春宮がきんつねの子であることを志向しているのである。——まことに以て両義的な存在として、春宮は造られてある。

ここで、中世王朝物語の世界では、密通などによる秘められた子は、最後には、決まって皇統に触手を伸ばしていたことに思いを至らさなければならぬ。

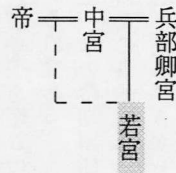
「あきぎり」「有明けの別れ」……等々、以下の系図の子供たち(綱掛けを施した)は、いずれも真の両親を公にできぬ存在者であり、しかし物語の結末に至っては、帝・春宮・親王に興入れし、或いは帝の皇子と偽って皇位を継承するという形で、必ずや皇統と連結し、物語を大団円へと導くのである。



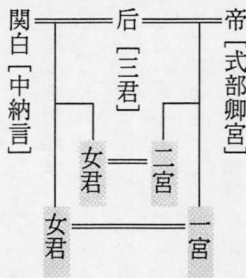
◆『いほでしのぶ』



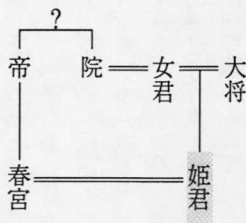
◆『昔の衣』



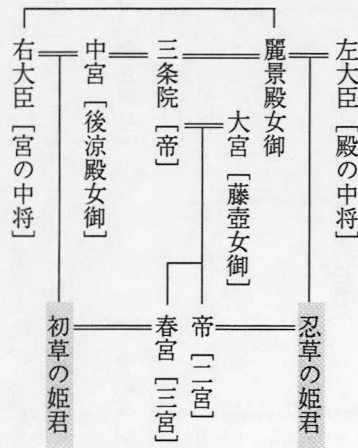
◆『木幡の時雨』



◆『むぐらの宿』



◆『我身にたどる姫君』



「しのびね物語」末尾に於いては、若君Ⅱ中将は、「おほきおほいと、中君」と結ばれてはいるが、皇統に与しているわけではない。また、しのびねの姫君は、最後には女院となるが、これは姫君側一族の栄華であって、きんつねのそれではない。

となれば、「しのびね物語」は、王朝物語世界の要請によって、その閉じ目にあたり、きんつねの落胤たる子を春宮Ⅱ新帝として顕出しなければ、有終の美を飾り得なかつたはずである。

しかるに、やはり王朝物語の禁忌として（或いはそれは破ら

れるためにあるが¹³⁾、帝の皇子でない、臣下の子が皇統に立つことは、物語の表面上では、避けなければならなかった。「しのびね物語」は、かような二重拘束のうちで、きんつねの落し胤であり、同時に帝の皇子であるべきだという、以て妙なる両義性を、春宮に賦与してあるのである。

五 「春宮の女御」の解釈について

最後に、現在までの研究で議論のある、「しのびね物語」冒頭のコトバ「春宮の女御」について附言しておきたい。

物語の始発、きんつねの妹は、次のように紹介される。
①御いもうとは春宮の女御きりつほにておはします。

(二七頁)

一方、物語の末尾近くには、次のような叙述がある。

②あくる春、「しのびねの姫君は」若宮をさへうみ奉り給へば、「帝は」いまだわうじもおはしまさぬことを、くちをしくおほしめすに、いとうれしくめぐづらしくおほしめされて、
(八一頁)

この①②について、神野藤昭夫氏は、「二つの記述の間には明らかに矛盾が」あり、それは「ケアレスマスというより、「春宮の女御」という古本段階の設定を、現存本が不用意に踏襲したことに由来する」と述べている¹⁴⁾。

つまり、物語冒頭で、きんつねの妹 桐壺女御が春宮を産

んでいたはずが、物語末尾に至って、帝にはまだ皇子もいないと語られているのは辻褄が合わぬ、ということのようだ。この問題は、大倉比呂志氏、岩坪健氏も論じるところだが¹⁵⁾、いずれにせよ、劃切な解を見ない。

まず、「春宮の女御」なるコトバについて。

確かに、「源氏物語」に於ける「春宮の女御」「春宮女御」九例は、いずれも「春宮の母である女御」という意味で用いられている。

しかし、「しのびね物語」に於いては、そうではなく、「皇太子妃」¹⁶⁾「春宮の妻である女御」と解すべきだろう。

例えば、「大鏡」の次の二例を見られたい。

a 女君は、三条院の東宮にておはしましし折の女御にて、宣耀殿と申して、いと時におはしましし。

(「大鏡」天「左大臣師尹」二二三頁)

b また、次の女君、それも尚侍、十五にておはします、今の東宮十三にならせたまふ年、まゐらせたまひて、東宮の女御にてさぶらはせたまふ。

(同人「太政大臣道長」二二九八頁)

a は「春宮の妻」を「女御」と称した例として参考になる。また、読まれる通り、b は「春宮に興入れし、女御となった」という例である。

加えて、中世王朝物語に於いても、同様の例が存する。

c かかるほどには、夢ばかりほのかなりし春宮の女御の御

面影、わするる世なく思ひしまれたまふを、

〔有明けの別れ〕巻一 二二六頁

d年月過ぎ行きて、姫宮、十になり給ひぬれば、春宮の女御になり給ひぬ。
〔小夜衣〕下 二二二頁

cの「春宮の女御」は、関白と今北の方との姫君⇒宣耀殿女御である。姫君は、春宮に嫁いだばかりで、皇子を産んではいないので、ここは、「春宮に輿入れた女御」としか解せない。また、dも、姫宮が十歳になったので「春宮に輿入れし、女御となった」というものである。

かような例からも、「しのびね物語」冒頭の「春宮の女御」は、「春宮に輿入れた女御」⇒「皇太子妃」と把握できる。
いま一つ、「春宮の女御」の「春宮」について。

恐らく、今までは、この解が不適當だった、と思しい。

すなわち、「春宮の女御」の「春宮」とは、「しのびね物語」中間部以降に登場する「帝」であると考えべきなのだ。つまり、我々が「帝」と呼ぶところの人物は、物語の始発に於いては、まだ「春宮」であったというわけである。

とすれば、きんつねの妹は、帝が春宮の時代にその女御として参内し、皇子を産まぬままた、ということになり、①②は、無理なく解釈できるはずである。

「矛盾」だの「齟齬」だの、「改作」だの「廢太子事件」だのといった諸々の説は、これで霧消する。

以上、「しのびね物語」の多種多様なコトバの網の目を辿り眺め、テキストの内部機構を検討し、同時に、それを王朝物語の系譜の上に置いて考察した。

本稿では、へしのびね型⇒古本しのびね⇒などといった、話型論的・成立論的概念に繋がる術語は、いっさい抛棄している。今、その表面に汪溢するコトバの群れを、テキストの内的連鎖のうちに、更に、中世王朝物語という広袤⇒光芒のうちに捉えたという次第である。

※「しのびね物語」の本文は、『鎌倉時代物語集成 第四卷』（底本

⇒丹鶴叢書本）に拠った。その本行本文は第一系統、傍記は第二系統、と認められる。ただし、本稿で掲出するのは、本行本文のみにとどめた。

また、他の作品については、以下のテキストに拠り、その頁数もしくは歌番号を附した。

- ▽「古今和歌集」↓全対訳日本古典新書（創英社）
- ▽「うつほ物語」↓室城秀之「うつほ物語 全」（おうふう）
- ▽「源氏物語」↓新日本古典文学大系（岩波書店）
- ▽「夜の寝覚」↓新編日本古典文学全集（小学館）
- ▽「狭衣物語」↓新潮日本古典集成（新潮社）
- ▽「大鏡」↓新編日本古典文学全集（小学館）
- ▽「平家物語」↓新日本古典文学大系（岩波書店）

▽「あさちが露」→大槻修「あさちが露の研究」(桜楓社)

▽「海人の刈藻」→中世王朝物語全集(笠間書院)

▽「有明けの別れ」→全対訳日本古典新書(創英社)

▽「石清水物語」→鎌倉時代物語集成(笠間書院)

▽「いはでしのぶ」→小木喬「いはでしのお物語 本文と研究」

(笠間書院)

▽「風に紅葉」→辛島正雄「校注『風に紅葉』」(九州大学教養部

文学論輯)第三六号・一九九〇年二月、第三七号・一九九二

年三月)

▽「苔の衣」→中世王朝物語全集(笠間書院)

▽「木幡の時雨」→中世王朝物語全集(笠間書院)

▽「小夜衣」→中世王朝物語全集(笠間書院)

▽「兵部卿物語」→鎌倉時代物語集成(笠間書院)

▽「我身にたどる姫君」→今井源衛・春秋会「我身にたどる姫君」

(桜楓社)

なお、引用に際して、中略した箇所は……で表した。また、「」

内の語は私に補ったものである。

【註】

(1) 例外的に、反復・重畳表現が僅少である物語としては、「源氏物語」第一部・紫上系の巻々、流布本「狭衣物語」、加えて、「あさぎり」「風に紅葉」「我身にたどる姫君」のそれぞれ前半……、といったものが挙げられる。これらは、現代的な評価をすれば、洗煉された文章で織り成されたテクスト、ということになるろうか。

(2) 萩原広道「源氏物語評釈」は、「其所にむねとある語。或は殊

更に多くつかひて。けしきをあやなしたる語。または伏線の脉を統ばしたる語」(国文註釈全書 七〇頁)として、「桐壺」巻に頻出する「野分」「風」「月」、「夕顔」巻に頻出する「あはれ」に、「眼目の語の標」〓〓〓〓を附している。

(3) 「源氏物語」に於ける、コトバの反復、場面の変奏という現象を、テクストの方法としてより積極的に掘り取るという視座は、以下のような論稿で提示されている。

池田和臣「引用表現と構造連関をめぐって―源氏物語第三部の表現構造―」(「源氏物語の探究 第七輯」風間書房・一九八二年) 同「源氏物語夕霧巻の引用論的解析」反復・変奏の方法、あるいは「身にかみ」夕霧」(「研究講座 源氏物語の視界」へ准拠と引用) 新典社・一九九四年)

池田節子「源氏物語の同語反復表現」(「国語と国文学」一九八五年三月)

同「場面の反復―柏木物語の同語反復―」(「国語と国文学」一九八八年一月)

鈴木日出男「源氏物語の文章表現」(至文堂・一九九八年)

なお、次の拙稿も併せて参照されたい。

「源氏物語宇治十帖のことばの線」(「詞林」第一八号・一九九五

年一〇月)

(4) 大倉比呂志「しのびね物語」(三谷栄一編「体系物語文学史 第

四巻 物語文学の系譜Ⅱ 鎌倉物語」) 有精堂・一九八九年)

(5) 「源氏物語」に於ける「女にて見奉らまほし」なる表現についての論稿は、枚挙に遑がない。いま、代表的・総括的ないくつかを挙げておく。

円地文子「女にて見奉らまほし」(「源氏物語私見」新潮文庫・一

九八五年)

阿部秋生「光源氏の容姿」(「光源氏論 発心と出家」東京大学出版会・一九八九年)

吉海直人「源氏物語」の男性美―「女にて見る」をめぐって―
〔源氏物語研究(而立篇)〕影月堂文庫・一九八三年)

立石和弘「女にて見奉らまほし」考―光源氏の容姿と両性具有性―(「国学院雑誌」一九九一年二月)

(6) 神田龍身「男色、暴力排除の世代交替―「石清水」「いはでしのぶ」「風に紅葉」―(「物語文学、その解体―「源氏物語」「宇治十帖」以降)有精堂・一九九二年・七八頁)

(7) 因みに、「風に紅葉」には「岩のはさま」なる表現が一例存する。これについて、辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻一―(九州大学教養部 文学論輯 第三七号・一九九二年三月)は、「はるかなる岩のはさまにひとりめて人目思はでもの思はばや(「新古今集」恋二・西行法師)が初見」と註している(五七頁)。

(8) なお、室城秀之「うつつは物語 全(おうふう・一九九五年)は、「されど、『野にも山にも』とこそ言ふなれ」(「内侍のかみ」巻)について、「歌仙家集本『素性集』「うち頼む人の心のつらければ野にも山にもいざ隠れなむ」の歌を引くか」と註している(四〇五頁)。

また、今井源衛・春秋会「我身にたどる姫君 一(「桜楓社・一九八三年)は、「野にも山にもあくがれぬべくぞはべるや」(巻三)を註して、「心のみ野にも山にもあくがれて道こそなけれ雪の曙」(「続後拾遺和歌集」冬・津守国夏)、及び、「親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重き絆なるべくおほえしかば」(「源氏物語」「柏木」巻)を挙げている(一九三頁)。

(9) 因みに、「我身にたどる姫君」は、例外的に、これらのコトバを、出家遁世にはなく、女を求める、いわば漁色Ⅱ狐色を表すものとして用いている。

二の皇子は、うたて世の人のそしりきこゆるまであだめき過ぎて、かからぬ野山の果てなく、よる夜中あくがれたまふぞ、
(巻一 六七頁)

野にも山にも、程なく御覽じ出づる御癖の恐ろしさ、
(同 一一八頁)

(10) ただ、「鎌倉時代物語集成 第四巻」(丹鶴叢書本)では、出家直前、若君に對面するくだりに、
あかつきに一本

其夜は御かたにふして、○夜ぶかくおき給ひ、
という形の傍記が存する。なお、「校本しのびね物語」(和泉書院・一九八九年)によると、第一系統諸本は、多く、ここを「あかつきに夜ふかく」としている(二七七頁)。

(11) 少なくとも⑤の場面には、
かくまでちかづき奉るも、いとびんなきことなれど、いまだ御心とけぬこと、見奉りしかば、
(六六頁)
中納言は内へまゐりて、うへ「帝」をみ奉るにつけても、思ひよらざりける御すくせかなと、つくづくとまもられ給ふも、またいかにおほさむと、いとおそろし。
(六七頁)

とあり、犯すべからざる宮中で実事Ⅱ情交が存したと考えてよからう。
(12) 神野藤昭夫「しのびね物語」の位相―古本「しのびね」現存「しのびね」・「しぐれ」の軌跡―(「散逸した物語世界と物語史」若草書房・一九八八年)・四九二頁

(13) 帝の皇子でない子が皇位を継承する、という禁忌は、しかし、「源氏物語」「狭衣物語」にあつては、むしろ積極的な物語展開の方法として破られている。

(14) 前掲註 (12) 神野藤論稿・四七六頁

(15) 前掲註 (4) 大倉論稿・二八二～二八三頁・二八八頁

岩坪健「しのびね物語」注釈(二)〔神戸親和女子大学 研究論叢〕第三〇号・一九九六年一〇月・九八頁

(16) 広島平安文学研究会「訳注「しのびね物語」(上)〔古代中世国文学〕第四号・一九八四年八月・二頁

(17) なお、「うつほ物語」にも、

都風をば、春宮の女御に奉る。

〔うつほ物語〕「俊蔭」巻 二一〇頁

という例が存するが、上坂信男・神作光二「宇津保物語・俊蔭全訳注」(講談社学術文庫・一九九八年)は、「東宮の母女御とも解せる。とすると、朱雀帝は后腹ではないことになる」と註している(二〇四頁)。

(かとう・まさよし 本学大学院博士後期課程)

伊井 春樹 監修

角川古典大観 源氏物語 (CD-ROM版)

源氏物語の多様な使用に対応した、初めての本格的なCD-ROMを作成した。以下のような内容と、検索システムを持つ。

一、本文

大島本の校訂本文とともに、尾州家河内本・別本の陽明文庫本・保坂本の全本文収録。四本を対照しながら読み、検索できる。

二、検索

1 語彙検索 校訂、翻刻本文のいずれからも検索

2 分類検索 事項を二四分類した総合事典を内蔵し、天候、

乗り物、食事等の階層によるジャンル別検索

3 品詞別検索 あらゆる文法情報を入力

4 色彩語・感情語検索

5 引歌検索 引歌箇所、新編国歌大観の本文も表示

6 登場人物・系図検索 あらゆる呼称に対応

7 古典集成・新大系など九本のテキストのページ情報

三、資料

大島本のカラー図版二〇枚、年立、地図等

角川書店編 紀伊国屋書店販売

本年五月刊行予定